

ぶどうの木

第5号

も く じ

巻 頭 言

ミミヤンの病氣

教会を求めて

真実を求め

わかたましいよまきほめよ

そのすべてのめぐみをお心にとめよ

かぞえて見よまの恵み

讃 歌

ある日の記録より

永遠の生命とは

証

うべ・われよきゆづりを

得たるかな (2)

近 詠

心づ肩の歌

句 集

八月十日・九重山万歩

わたしの旅行記

榎本 牧師 (1)

正野 真宏 (2)

大野季太郎 (7)

S · H (9)

丸橋 幸市 (11)

正野 賢子 (13)

ル テ ヤ (18)

安 東 (18)

迎 礼子 (21)

大口 和子 (23)

伊規須養子 (26)

正野興志尾 (29)

? (30)

ル テ ヤ (80)

岩井芙美子 (31)

正野 真宏 (35)

八幡前田教会

巻二 頭言

榎本 牧師

わたしはぶどうの木、わたしの父は農夫である。

(ヨハネ一五・一)

「ぶどうの木も今年で第五年を出す様に成りました。桃栗三年柿八年と言わ水々おります。どんな果樹でも果實を看けるまでは、何年かの準備期間があります。手入れし、水注ぎ、肥料を施し、草取り等の慎重な結果として結実いたします。五年間、皆様の祈りと努力に依つて、こんなに素晴らしい教会誌が出来る様に成ったことを、心から感謝しております。『ぶどうの木』から『活水』に転載された記事が、全国に行き渡つてその処を播種の果を結ぶ事でしょう。

「植える者も水もそそぐ者も、ともに取るに足らない。大事なものは、成長させて下さる神のみである。」

(ユリント第一・三・七)

更にこの『ぶどうの木』に祈りの水を注ぎ、投稿の肥料を施して、主の恵みによつて成長して、主に喜ばれる多くの果を結ぶ様手入れして行きましょう。『私は文字がないから』と言わないで、今ヤンを執つて、今主があはれた心で剣を語り給うか？ 今何をしむか？ …… を気軽に書いて投稿して下さい。適当に鉢も入れましょう。つかい棒も加えましょう。主の喜び給う果を結ぶ様手入れをさしていただきます。

全この果樹は年中手入れしてこそ上質の果實を豊富に得るので、もう今日から、今から思切つてヤンを執り『ぶどうの木』六号の原稿を起草して下さい。



ミミヤンの病氣

正野 真宏

ミミヤンとは、わが家の長女の愛称である。本名は、のぞみ。といい「この奥義は、あなたがたのうちにはまずキリストであり、榮光の望みであるじ（コロサイ一・二八）から命名した。現在九月であるが、本人は目下立つ練習、歩く練習に余念がない。愛称ミミヤンの語源は、兄貴の謙一がまだ舌がまわらずにミミヤンミミヤンというので、我々もついミミヤンと言ひ出すようになったからである。

ミミヤンと謙一とは年子である。一年四月しかあいていない。だからミミヤンが生まれる時は、まだ母体が十分回復していないときであるので少なからず心配であった。それに最初の出産は又二日かいるという難産であったし、弛緩出血を起した前歴もあったので、祈らざるを得なかった。もう一つは、核家族であるためにいざ陣

痛となった時、私がいないと連れてゆく者がいない。これも祈りの課題であった。

予定日よりおよそ一週間早い十月三十一日の朝陣痛が起った。その日は数日前に祖母が急死したための忌引休暇であったので、普所であれば出勤しているところを、私は家にいたのである。

なんと「神のなされることは、皆その時になつて美しい」（伝道。書三・十一）ことであろう。私は謙一を近所に預け、タクシーを拾うのに暇だった。無事九州厚生年金病院まで送り込んだ。

家内はそのまゝ分娩室に入れられたので、私は海老津の母にすぐ来てくれるように電話をかけていると、「生れましたよ」という声、「はう、何処の赤ちゃんかいな、うちも元気に生れるとよいが」と思っていると「正野さんですか、生れたのですよ」と言われたので驚いてふりのえると、助産婦さんが赤ちゃんを抱いている。

「アレ！ それうちののですかい？」

「そうですよ」

「どちら、男？ 女？」

「女の子です。」

いどになりはしないか。 そうなつた時、お前は子供になんと言訳けするか、お前は自分の主義を貫くのはいい、しかし何んで子供を巻き添えにする権利があるか…… そうゆう考之が心の中に浮ぶ。

私はこれに反論を試みた。

むろん私は單なる冒險主義者でありたくない。医学の力も認めないわけでもない。むしろ医学も神様の手の内にあるものであり、感謝してその恩恵にも浴そう。 しかし医学は万能ではないのだ。 私の知っている子供さんは熱が出たので病院へ行き、あらゆる措置を受けたが下らない。四十度近い熱が五日間も続いてやっとおさまったという。 癒す力は薬ではなく、自分の体にある。 言いかえるならこれを創られた神様である。薬はその手助けをするにすぎない。これがその一である。

その二—— 君は日頃何事もない時は神さま神さまというが、困難に会つた時はざつと他のものに頼るのか。 それでは「あなたがたのわたしを救う事実がどこにあるか。…… わたしを恐れ

る事実がどこにあるか」(マラキー・六) 神様の真実に対し、我々にも真実というものが少しはあつてもよいではないか。 「悩みの日に我を呼べ」と神様は言われる。 もし君が「我が仕うる万軍の神エホバは生く」と信じるなら、この時こそ神様のフトコロにとび込むべきではないか。

その三—— 我々は癒されることを願うあまりあらゆる方法を講じる。 勿論悪いといつていゝるのではない。 たゞ言いたいのは癒されることばすべてであつてはならないということだ。 これによつて神の榮光があらわされるべきである。 言いかえるなら、神は生きておられるという証しが大切なのだ。 そのあかしが今後の私にとつてまた多くの人にとつても力となり望みとなるものである。 その証しは、徒らということによつて起されるということを教えられている。 今、君が医学の力により頼むなら、成程、治るかもしれない。 しかし、そこには治つたという事実だけしか残らないではないか。 昔の聖徒は命をいけてその証しを立て、我々に残してくれたのだ。

聞

私はいろいろの迷いもあったが、神様だけに信頼することにした。そして導きを受けなければ病院には行かないことと決心を決め、家内にもその旨を告げた。

「許せミミヤン。パパは信仰があるように見えるけど、こんなことになるとうらついてしまう。君をすぐ病院へ連れて行って薬を飲ませてあげたい。でもパパは連れてゆかないことにしました。パパは神様を信じています。本当はこんな弱い信仰ではないのですけど、一生懸命信じているのです。一生懸命といったら、まだ心の中にくらくら不安が残っているからです。でも神様は「カウシ種ほどの信仰があれば、——」といわれましたから、きっと受け入れて下さると思います。ミミヤンもつらいでしょうが、もう少し頑張ってみよう。これはパパにとって大切な問題なのです。」鼻がつまんで舌を弄るをミミヤンに向って私は心の中で語りかけた。その夜ふと眠りからさめた。スタンドがついている。不審に思って視線を横にやると家内が濡れタオルでミミヤンの頭を冷やしていた。

どうやら一睡もせずに見病をしている様子。よく見ると彼女は泣いている。ミミヤンを不憫に思っただろう。家内の訥やかな愛情を見て、母親とは偉いものだなあと思った。そして今までノーノーと寝ていた自分が恥かしくなった。それで後手交代を申し出たが、あなたは明日の勤めがあるから寝て下さい。私もすぐ休みますからというので、まことに素直な私は再び高イビキ。家内の方はその後床にはついたが、心配でよく眠れなかつた。さうである。ここいらは私の無神経の故か、男と女の精神構造の違いか、いずれにしても彼女の献身的な看病は大切なことであつた。家内に感謝している。

さてミミヤンは翌日も下らなかつた。これで三日目である。あやふやな信仰しかない私はもういっぺんゆさぶられた。ミミヤンも体力を消耗しただろう。肺炎を併発しはしないか、熱で脳がやられはせぬか、恐れていたことが本気になるかもしれないと思うとあと戻りしたくなる。でも私はもうひとふんばり忍耐して待とうと思つた。それで家内に言つた。「今だに癒され

ていない。杖態は初めと変わらない。でもい
ましばらく、少なくともあと一日忍耐して待とう
ではないか。その忍耐が深ければ深いだけ神様ら
しい業を行なって下さると思ふから。しかし、
あるいは我々が期待していることとは反対の成り
行きになるかもしれない。その時、泣きごとを
言わないことにしよう。神は善にして善を行な
い給うと書いてある。だからアブラハムがイサ
クを捧げたように、ミミヤんを神様の手に捧げよ
う。我々の信仰はそこまでゆかないといけない
と思ふ。し

家内もうなづいた。そうゆう時、福岡で保健
婦をしている義妹がヒョッコリ訪れてきた。神
様はなんとゆきとどいた方であろうか。家内も
かなり疲れていた時であったので、どんなに助か
ったかわからない。三人で家持をしながら語り
合っているうちに、お互いの信仰はもう一度固く
された。

そしてその翌日の朝、すなわち発熱以来四日目の
朝、熱が見事に下がったのである。ミミヤんの
目に生気がよみがえってきたのがハッキリわかる

。神様は信頼に応えて下さったのだ。最後ま
で耐え忍んでよかったと思った。勿論、自分で
信仰をもったというより、ただ信じよう、従おう
とする心と思いを御霊が守ってぬんごろに導いて
くださったのだと思ふ。弱い者には弱い者のよ
うに神様は導いて下さる。

このたびは「あなたがかたが足の裏で踏むところ
はみな、わたしがモーセに約束したようにあなた
がたに与えるであらう。」(ヨシュア一・三)とあ
るように、もうひとつ新しい経験をさせていただ
いて感謝である。

「わが仕うる万軍の神エホバは生く」(列王上
一七・一)また「悩みの日に我を呼べ、われ汝を
助けん。しかして汝我をあがむべし」(詩五〇
、一五)と聖書に書いてあるが、まさにこのとお
りである。これが私のあかしである。

完

教会を求めて

大野 季太郎

神よ、しかが、谷川を慕いあえぐように
わが魂も、あなたを慕いあえぐ

(詩篇四十二―二)

八幡前田教会で、六年間、御世話になりまして、
大段に参ります時、送別の記念に戴きましたし
りに、ヘブル人への手紙 十二―二の聖言が記さ
れておりました。この聖言によつて、私の様な
弱い者も励まされ、強められ、支えられて参りま
した。薄氷の上を歩くような生活の中にも、八音
ふさがり、どうにもならない時にも、絶えず、
天にある窓から、此のまを御ぞみて、今日まで、
参りました。

曾二大戦世界大戦当時、私は、豪嶽景新居浜に
ある黒崎煮業の専談に勤めておりました。
工場長は、徳久 裕氏で、次長が四方田氏でし

た。終戦後、四方田氏から、遠達かきまして、九
州へ参りました。四方田氏方に、泊り、翌日は
小峯に私達親子三人が泊ることに家を帰って
参り、そこに寝着さすした。

主に信頼する者、
いつくしみ、愛で囲まれる

(詩篇三十二―七)

聖言どおり、御縁のいつくしみに、囲まれて
おりました。

小峯に住居が落ちてくと、先づ、教会を探そうと、
地図を開いて、鉛筆で、寸法を計りますと、中間
、折尾、は、大野近い様でした。それで、早速、
出かけて参りました。

山に登って、街を見おろして、十字架のついた
会堂は無いかと、探しました。あ、ちの山、こっ
ちの山、登ったり、おりたりして、中間の町へ出
ました。朝から晩まで探して、やっと、エケ所

尋ねあてました。それは、カトリックでした。
日も傾いたので、帰りかけました。一文も金

を持たないので、腹は減る、足は冷れる。あの山の北側が小峯で、あそこまで帰ればと、頑張つて歩きました。むこうから、中学生が来たので、「小峯まで帰るのだが良い道は、ないだろうから」と尋ねると、「小父さん、小峯までは、五里もあるんですよ。北処から、電卓に乗って、愚崎まで行き、バスに京つて、小峯へ行きなさい。それか、早道ですよ」と答えて送つてきました。江戸がないので、別の子供に尋ねても、同じ送つてくれた。小銭借り不良と間違えられても困るので、「道を覚えていないので歩いている行くと、まづて、真つぐに歩きたまいました。町中を離れると、下駄を脱いで、足袋履いで走り出しました。どうとう後水？、足が棒のようになつて、動かないなりました。丁度その時、手頃な竹箒が一本、落ちていたので杖にしました。神様は、いつでも無くてならぬものは、頼まない前から、知つていらつしやると、感謝しました。杖にすがつて、一歩一歩、一度も歩いたことのない山道を、祈りながら歩いている、やつと、家に着いたのは、午後八時頃でした。その夜から、三日三晩、眠りつ

づけました。四日目に、元気に目覚めました。次は、直方方面にキリスト教会を、探し求め、歩きまわりました。歩道もお金も持たないで、朝から晩まで歩きました。途中、小まな公園の石の上で、祈りました。教会は、沖々、見当りません。祈りながら、歩きつづけてきたが、足の前へ、道をなくになりました。丁度、その時、竹箒一本が落ちて来て、杖として、これに、すがり、一足一足を踏むを繰り返した。ようやく、丸持頃、帰り着きました。その時は、口もきけず、話ができませんでした。歩道も、息もも驚いて、愚崎から、医者を運んでくれましたが、私は、少しも、気付きませんでした。医者は、「大層、痛れているようですよ」と言つて、帰られたそうです。数日後、大崎市あまの丸教会、後真の泉元から、「〇日〇時〇分に小倉駅に着きました。足が、冷たいから、駄まで来てほしい」と連絡が来ました。電卓も、愚崎から小倉へはいりよした。途中、停留所の名を覚えようと、算盤から、外を眺めておりました。その時、一寺衆のついた家のキラツとみえま

した。前田町電停のすぐ近くでした。

「ここに教会があった！」と嬉しくなり、次の日曜日には、小峯から歩むいつ、その教会へ参りました。屋根は、低く小さな教会で、「八幡前田熱会」と書かれていました。なつかしい植植先生のお話がありました。切角、与えられた教会ですが、小峯から、教会まで、徒歩で往復することは大変な事です。何んとか、教会の近くに住まわせて貰いたいと、小峯の山で、毎日毎日、祈って居りました。或る日、息子が、「お父さん、祇園町に手頃な家があったから借りたよ」と云いまして、程なく、引越しました。新しい家から、教会へは、一本道を、電車通りまで下りると教会で、十分かかりません。

神様は、祈りに、答えて、教会の近くに住居を与えて下さいました。各集令に出さしていただき、毎朝の早天祈禱会で、恵まれた日々を送ることができました。

完

↑ 眞実を求め

何が眞実であるか。何が喜ぶであるのか。又、何を求めて人は生きて居るのか。

これらの言葉はいつも心に去来する。時々生きて居る事に空しさを感じる。自分の行う總ての事が無に思えてさる。

世間一般が考える通りに考えず、独自にいささか極い探求心を追求し続けた為か、並の人間から少し変わった角度の時を持ちつづけ、来たような自分の生き方。これこそこれでよいのだろうか。

何を求めているのか。それは常に漠然と憧れの様な物であり、又光り輝く星の如き希望であり、そして夢でもある。しかしいつも自分には、それが明確には分らない。

具体的物、又は形態様では無いのである。幾ら追求しても自分自身には判明し得ないもの。それは一体何であるのか。

時として、この漠然たる追求に不安を抱く。

何も見えない事。おりに得ない事柄に何故このも長
き年月求め続けるのかと。

昔後、ほとんどの聖書を聞いた事のない自分であ
るが、苦しみの時、悲しみの時、後悔や不安の段
中にある時は聖書と読む、聖書の言葉から、それ
らの原因となる縁をとり去って欲しいと願うか
らである、信仰においてもこのように登いののであ
る。

喜ぶである事、この世に喜ぶに輝くものがある
とすれば、幼い子供の笑顔ではないだろうか、又
動物達の無心な愛嬌も喜ばしきものだ、他には美
しき自然のすべ々が喜ばしき事だ、人に対して喜
びを感じる事があつても何とはなしに不安が残る
そして、人にうとましくなる、話す事より読む事
に喜ぶを見出しにくる、独りきりな読書にゆけり
あらゆるものから遠ざかる、しかし自分の求めて
いる喜ぶは果して読書や独りきりを居る事から得
られるのであろうか。

真実とは何であらうか、常に知りたいと願う。
原因や結果ではなく本当にそこにあつたもの、又
あつた事さ、それらの根源をさぐって行く時、真

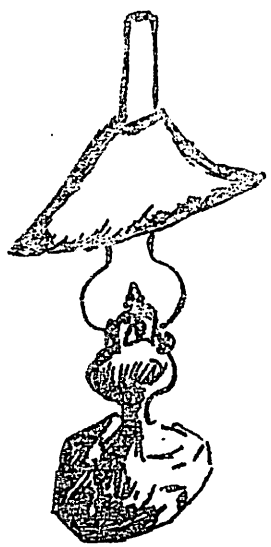
実に突き当たるかも知れない。

聖書と読む事、自分にはなかなかの出来なく困
つて居るが、心ここにあらず目だけで言葉を追っ
て居ると何の事やら分らず、ただ聖句が頭の回を
巡道物のように漂つて居るに過ぎない。

心の目を開き鋭く気持を引きしめて居る時、聖
句は一つ一つその真実を知らせてくれる。

苦しみや悲しみだけで聖書が成り立つて居るの
ではあるまい、自分の無知や稚さを嘆かないで、
もつと深く聖書にふれ、無上の真実に益れた生
き方をしたいものである。

兒



わかたましいよ、主をほめよ。
そのすべてのめぐみも心にとめよ(詩。三二)

丸橋 幸市

長い間イエス様を信じて参りました。弱い小さい信仰しかない私にもイエス様は豊かな恵みをお与え下さいました。昨年からの出来事を振り返ってみましても神様の憐みと主に在る皆様の御愛の故に今日在る事をしみじみと感じ感謝の日々を送らせて頂いて参ります。昨昭和四十四年正月に光市に居る娼婦の処へ家内のサトヨと一掃に泊って参りました。二十二日夕一寸外出したまま帰って来なく帰って参りません。子供達も心配して車で手分けして街路を何方北方と暗くなる迄捜しましなに見つかりませんでした。仕方なしに警察へ面けて帰りました。何分交通事故も多いし不幸な出来事が多い時ですから、帰りました。一生懸命に祈って参りました。その時、女主人イエスを信ぜよ。然らば汝、及び汝の家族も救われん」と聖言を与えられ勇気が出て一晩祈り続けました。翌朝夜が明けけるのを待つて車の通る道ならぬでも畑でも片端

から捜しました。見当りませんでした。仕方なしに引揚げて帰って来ますとアバートの五十未位手前でバトカーにいました。見ると中に家内が乗せられて居りました。早速そのまま近くの留外科病院へ運ばれ急患として診てもらいました。警官の話によると山の辺で人家もなく車も通らない道から田の中に落ちて居て居ても誰か気が付かなかった。たまに農作業に通りかかった人が発見して通報して呉れたとの事でした。その時の家内の状態は死の一步手前で声も殆んど出ない様な有様でした。レントゲンを撮り診察の結果は左手の二ヶ所肋骨が圧三本右一本折れてその為左の肺を突き破り血液が肺の中に入って居りました。その時は余りませんでした。医者は嘆息をしながら言われました。お出せませんでした。一週間経って判りましたのです。肺の中で血液が立腐る様に凝って居るので手術して取らなければならぬ。然し七十才にも成れば手術は無理で心臓がもてない。片肺で我慢して呉れとの事でした。凡疋を引くと肺炎にかかり易いから先命を付ける様に言われま

入って来られました。早速祈って頂きました。私は嬉しくて地獄で仏に逢うとは此の事でしょう。家内はまだ未信者ですから家内の怪我の事で祈りして頂く事は出来ないと思っていました。それだけに嬉しく心強く成りました。その後は毎日に快方に何うて参りました。三月十三日にはホッポッハ痛へ連れて帰ってようしいと医者の方が出ましたので子供達の半ニ日に合衆して他の車のケイ時間を見計らって午後十時に光帝を登って翌十四日午前三時に無事に帰りました。十時に製鉄病院へ入院する事になり整形外科と内科に診て貰いました。医師の話では骨が二ヶ所も折れている。肩に落ちた位でこんなに骨が折れる苦かない多分交通事故でやられて人気がない処へ捨てられたのであろうとの事でした。皆様の尊いお祈りと主に在る愛による励ましに依り私共の心は明かしく、日々にかつけられました。四月二十日に退院と決まりました。時あの死の念から神様は祈りに応えて救い出して下さったと感謝していっぱいでした。今はすっきり癒されました。先々月保婦所のレントゲン車が来ましてレントゲンを撮り血圧を計って

行きました。三日後に精密検査の急保婦所へ来る様にと連絡がありましたので二人で参りました。早速予実を撮りました。結果は二、三日後に通知すると言われましたので首を長くしてその日を待つておりました。精密検査報告書が参りました。それはほんな事か書かれていました。全く普通の生活で良い。医師による医師も検査も必要なし。こんな嬉しい事はありませんでした。神様は何時までも破った肺を癒して下さったのが肺の中の血の凝ったのを何時取り出しなされたのか、それとも肺を全く新しく創り変えて下さったのか私にも家内にも今分かりません。不信仰な家内におんな大きな恵みを戴いたのも先生はいの皆様の主に在る愛とその祈りに応えられた結果でした。お力のよ、然らば与えられん。と聖言にあります様に家内は神様から肺を与えて頂きました。今は片肺ではあります。神様にはどんな事でも出来ない事はないという事をもう一度祈らしく知らせて頂き感謝して居ります。又主に在って祈って下さった皆様の御愛に對して心から感謝して居ります。今後共よろしくお願ひ致します。

『かぞえて見よ主の恵み』

正野 勇子

「お母さんは、子守なんかしないで高尚な生活をしてもういたい。Ｌとは、かねて長男が言っていたことでもあり、又私の願ひでもあった。

すべてのものに時がある。私等夫婦の自若の道が開かれ、昨年春、孫の子守から、家の借金が解放され、晴れて自由の身となつた。

「あはたが私の内に長き願ひを起させ、これを實現させて下さるのは神である。私たちの願望がかなえられたのである。

牧師先生にもお祈りしていただいていた。もし或る日こうおっしゃつた。

「これから家庭集會を定期集會として毎週野村先生にお願ひすることになりました。Ｌこうおっしゃつて、御用するに當つて、私に御教訓を下さつた。

一、家庭集會は神の臨在のある所である。

家庭が聖別されるように務めること。

一、いつも神のみ言は如何にと神に働いて頂くこと。人間のわがは負担にならばかりである。

一、ダビデが契約の箱をベリシテから牛車で運んだ時、牛がつまづき契約の箱がたむいたので、ウザが上から押えた。神はウザを打たれた。ダビデは恐れ、契約の箱をオベデエドムの家に移した。願ったオベデエドムに神は天いなる祝福を与えられた。

そのように、あはたの家に祝福がありますよ。

私は、このお言葉を心の隣に書きとめたのである。かくして再開されたのは昨年の八月十八日、以前にも八回牧師先生に來ていた。通算すれば九回目ということになる。毎週定期集會となり、私の心構えも自然違つて來たと思つた。

今日まで、はやく十回の會を聖めた。

皆主人慰まれて、翌一年の感謝會を皆でお奉も持つて來てしましようぜ、と言うことになり、來る十九日の集會のあと感謝會と定まつたのである。

私はその日の為、記録帳をひろげて、主の恵みを

一、一、拾つて見ることにした。

一、四十四年八月二十五日丁姉感謝会

この方は牧師先生のお説教から慰まれ、家庭集会で救われたのほこれが初穂である。

この時の証しは豊後病院でも若らなかつた十一年来の病気が、必死に甘つてご自分で祈つていられた時、

「安かれ、汝の罪許されたり」

み事を聞いた途端、全くいせよれたと、着面喜びをもつて語られた。松尾らは、皆も今も神の力には変わりなく、今もなお神は、生きていられることを知り、一層信仰を確くし主を崇め感謝した。

一、次の集会には、H姉も集会に導びかれたりである。

一、九月十五日この時も又新しい方三名を丁姉は導びいて来られた。

一、九月二十九日又新しい方が求めて来られる。

一、十月六日、求道者のN姉二年来の胃がいようがいせよれ、貧しい中より捧げられて感謝会された。

一、E姉の御主人、大阪に転勤になり、お別れの挨拶と共に、慰みをもつて感謝会開かれた。才三回目の感謝である。

一、十月七日丁姉とN姉献金の申出あり。

慰みがけはいいことであつたので、一度はお断りしたが、強いて差出されるので、神様に捧げなされる純心な捧げ物を、断るべきではないと示され、献金のお祈りして感謝し受取る。

一、十月九日一十三日の五日間、八幡前回教会に於て、松岡忠二郎先生の聖会あり。

家庭集会に導びかれたM兄は、私の家から、八幡の聖会に毎日出席する内、すつかり変わった救われた。松岡先生も特別喜ばれた。十一年間も精神病院に入れられていたからである。「来りて神の救いを見よ」主の驚くべきみわざよ、ハレルヤ

一、十一月十七日孫娘の誕生を祝して感謝会。

一、十二月八日

五名の方が献金なされるようになった。誰か責任者を選ぶことを祈りの内に示され、丁姉に会計をお願いした処、心良く引受けて下さつ

た。感謝。

十二月二十二日クリスマス礼拝、並に祝会
ツリーにサンタヤ、星など飾付ける。

「すべての人を照らす」

まことの光があつて世に光を

ヨハネ福音書のみことばによつて、クリスマス
スの真の意義を始めて知つたとおっしゃる方
が何人がおられた。

えういふ方もおられるだらうと思つて、聖誕
劇を作つた。けいこの暇がないので、十二名
の方一人くせりつを言ひて、役割をきめて
。下姉はよく協力して下さつて、夜装を作つ
て下さり、天使の役を息子二人にさせ、
せりつもちやんと覚えて、見事に演じて下さ
つたので、大変引立つた。

皆五人も一生懸命演じて下さつた。三人の博
士は本物のようによく出来た。野村先生も博
士の一人になつていたゾいた。

観客は一人も居らなけりのに、皆五人生れて始
めてで、こんな面白いことはないと言つて喜
こばれた。

Mさんという壮年の男の方が何も言わないの
に、献金をはずまれた。共に食し、共に樂じ、
皆満足なうであつた。

聖誕劇することによつて救主の御誕生の由来
を知られたことと思つた。

一月七日集會三十回記念感謝會開く。

下姉初めて福音聞かぬ喜こばれる。

この方はノイローゼが其の後りせられたら
た。

一月二十八日感謝會。

下姉の息子五人鼻病いせられ、又交通事故が
神の助けによつて、紙一筆で一家が助つたこ
とを証しされた。

二月二十五日下姉感謝會開く。

下姉に導びかれて来られた方で、ご自分の足
はまだ殆つてはいないが、先に感謝をします
とおっしゃつて、皆五人におすしをふるまわ
れた。

三月四日一姉妹導びかれる。

主の選び給うたお方でしよう、以来集いて、
毎週喜んで来られ、慰みに、慰じて得志のレ

ス編むよつて集會湯を餅つて下エツた。

一 三月七日椅子と高足の台を歌金より購入。

集會は椅子にした。足の悪い方のためと業になつて感謝。

一 三月二十五日

一 姉いつの間にか集會業内の箱板を御主人に作つていたおいて御持参、牧師先生の許しを得て「来りて見よ」とみことばを冒頭に書き集會月日書入れ表示す。

主は私の思も及ばぬことを、一 姉を通してして下エツた。感謝。

一 三月三十一日

隆主の恵みにより病人を与えられた。

結婚を祝して感謝会開く。

一 五月六日、兄自ら尋ねて来られる。

まだ四十才の壮々たる方であるが、非難に目が悪い為不遇になられた方。何とか立直りたいとおつしやつていられた。終戦後アメリカ兵からヨハネ福音書をもつて読み、信じて

ならキリスと思つていと云う。惜しきかば病気の為入院されてゐる。

一 一 姉感謝会開く。

この方は信者の方で八幡までは血圧が高い為礼拝出来なかつたが、ここに集會が開かれ、

一 週間の集會が待ち長いとおつしやつて、健康を神の恵みと感謝打さつた。

一 来る十九日に一年の感謝会にこの一ツ一ツの主の恵みを、お証したいと思つてゐる。

一 主に感謝せよ主は恵み深く

小まむ集いではあります、主の恵みを捨てて見ると驚かされます。主は与え、与えたく、決して

出し惜しみなされる方ではないことを知ります。受取る側の方が整つていない。だから恵みと、恵

みの間に谷間がある。人間の力で行ふではどうにもなりぬ問題も多々あつた。

心配事が起る度毎、牧師先生初め多くの聖徒の方々に祈つて頂き、乞の祈りに交えられ、今日に至つた。

振返つてみると祈りはすべて聞かれていますのであ

「あなたがたは、刈入れ時が来るまでには
まだ四ヶ月あると言っているではないか
。しかしわたしはあなたに言う。
目を上げて畑を見なさい、はや色づいて
刈入れを待っている。刈る者は報酬を
受けて、永遠の命に至る実を集めている。
まく者も刈る者も、共に喜ぶのである。
……わたしはあなたをわかかわして
、あなたがたが労苦しなかつたものを刈
りとらせた。ほかの人々が労苦し、あな
たがたは、彼らの労苦の実にあづかっ
ているのである。」

主は生きていて今に至るも働か給う。

聖書のみことばは真理であり、真実であった。

罪けがれし我をさえ、主は愛して、御血をもつて

あがなひ、人が三十年働いて得る島を八年に短縮

して下さり、すばらしき生涯に入れて下さった。

そればなせか……私に榮しみ遊ぶ為か、

左にあらず、滅び行く魂を愛される故に、救霊の
御印の端くれに使つて下さる為であった。

二十年前のことである。

神なんかあるかと、敵という我を、人からにあら
ず、人によつてではなく、主御自身が啓示して下
さった。「神は愛である」と

「我れを選びしにあらず、我れを選べりし
私を特選の民として選ばれたのであった。
どこに良き所ありや、何にもない。あるのは
罪だけである。なぜこのようば者を選ばれたか、
神は愛であるからである。」

私は何も知らない。只誰が何と言おうと、
「神は愛である」と

今日までえれだけを説いて来た。今後も語るであ
らう。「神は愛である」と、私は主の恵みを教え
ながら、主の御愛を満喫していた。

(昭和四十五年八月八日記)

「終り」



讚歌

ルテヤ

・神の愛、如何に答えん巧なき

我をかくまへ 愛し給うとは

・^{カサミ}聖書読む、我と語らう主の愛に

只有難くかゝりこみ圓くなり

・弱き我、あわれみ給えと祈るかな

御霊の導きひたすう求めて

・人も訪い、人も来りて讚美せば

こそなき幸の泉と湧きて

・暗き部屋、朝けぬ老^{おと}婆の召物も

洗いつ折れり神の守りと

・四度目の訪門空し我足は

彼^かの鎖りとつけし如くに

・あわれみて 貸せしお金は仇と有り

さけゆく人ぞ あわれに思ふ

・貸金は 彼れにやりたし更に又

世きおとつ水と 与えんものと

・聖霊の、みちひきならは如何にせん

福音の子らの抱みと園きて

・わが園り、毎朝りせば小きき手に

籠持り来り孫もひと後

・造りま、思つて崇むる毎朝

日毎赤きも 我は樂いむ

・聖徒々に、毎夜せば喜ひて

靈肉共に 恵みうけりしと

・福音の、集に重ぬて之十回

恵み愛りしと 感謝すま有り

・老えり人、信づるみ福音今の花

すこやうにあれと 我祈りかな

・用意し、我れを待たざり救われし

人の厚意の有難くしと

・毎日が、母の目なるに子の招く

我れ愛くま有り 神の恵みと

終り

ある日の記録より

岸 東

睡眠不足で開け今週、不信、疑心の嵐に吹きまわされて、ここまで来てしまった。E.D.、暗中、

どこかに、何か、引つかかるものでもないかと、探る思いは空を切るばかり、かといって、早く辞退申し上げれば良いものを、それもできず、E.D.、時間だけが、いそぐに過ぎさつてしまった。何とかが成る、神、我を捨てたまわじしと軽い気持ちで、お引受けした、次週の御用………も、あと十二時間足らずに迫つてしまった。フいに、ここまで来てしまつた。

「何とかせねばし」何とかせねばしと思いつく。次週の御用であるヨハネ伝第二十章を讀み、調べる、考える………また、讀み、調べる………こんなことは、すでに何度もくり返しているのに、消んでしまつてゐるのに、なぜだ、どうしてどう

う、少しも、平安がない、心が着着かない。御用のことが心配でしようがない。

「不信仰者が、信せよ」と語る、語りおぼはうめ苦しみか………「あめでまほしい今からでも遅くない、できないことを電話をしようか、………でも、もう夜の九時にもなつてゐるのに、………あれもできない。………あめどうしよう

その時、今日念書掃除の帰路。「明日の日曜日、板の御用のために、祈つて下さい」と、青年念の兄弟にお願ひしたことを思い出した。「えうだ、みんなが、僕のために祈つてくれるんだ、頑張らなきゃあし」
そしてまた聖書を読む、………しかし、何も新たにならぬ。時は過ぎる、………こんなことで良いのだろうか、——長くあるはずがない——何とかせねばし………
そして十一時をすぎたころ、………時折リ、無かなゆえに、どうにもおぼれし、と思ふ気持ちが起る。するとえの一瞬、ストツと何か心の安らぐものを感じた。しかしそれでは解決はつかない、

又、もとの世界へ引戻されてしまう。

「この不信仰者が、何と、おじめにも御言を語るとは、罰あたりもいいとこだ」といふ声もする、又、不安と焦りは募るばかりである。

また聖書研究へ逆もどり、……「信じるとは

「信じるとは」へブル書十一章から、我と我身に言い聞かせるように、何とか信じることを見つけたいと。——分かる、ことばでは、その意味は長く分かる。くり返し、くり返して読む。……えうだ、そのとおり。明日のことをも信仰だ、まだ見ていないことを確信することだ、そしてそれは従うことによつて為る。行動によつて知ることが出来る。さあこれで、明日の日曜学校は又文夫だ。——見ずに信じることを語せる、——でも、……でも、

神様に従い得ない自分が、身につかない御言葉を語ることはできない——できない、どうすれば——祈る、——ヤフと祈る以外にないことに気付いた。……神様、何とかして下さい、神様のすることと、——明日のことを、「見ないで信じる者はよいわいである」と。

スーツと不安は過ぎ去った……「あめ……感謝です」

「主よ、どうかこの身や、言葉は失敗してもいいです、主の御名が慕われれますならば、——と祈る。

感謝

「信仰によつて進む者は、時には震えぬのよ、つつも盲目的なまでに従おうとする。

見ゆる祈りよ、歩む祈りは計算し、熟考し、用心し、遂には足がすくんでしまふ。

エドマン著「人生の訓練」より

永遠の生命とは

迎 礼子

人は皆、自分に必ず死が訪れる事を知っている。又死は全ての人間に平等に与えられたものである。現在私達も自分の目で見、日常経験しているものに完全なものは何もない。無限の宇宙空間の中に僅か七〇年のささやかな生涯を送る私達の生命にはいったいどのような意味があるのだろうか。

私達の目の前に巨大な姿で広がり、私達と恐怖の戦慄に陥し入れているこの世界は、真実の生命ではなく、ただ表面的なものにしかすぎない。永遠の生命とは、それから外に出ようとすると、即ちイエス・キリストにおいて復活された彼の上で現れ、又それは私達全々のものの為に再び現れることでもある。

そしてそれは、この世的なものではなく、神的な本當の生であるが、私達はそれがどの様なものであるか概念で表わす事はできない。私達がこの永遠

の生命に向けて造られているという事を私達はイエスキリストに於いてのみ知り得るのである。

人はこの世で、権力、名譽、地位、財産を問題にしま、それを我が物にしようとすると、それら一切は結局は無に帰するものである。それでは私達は何を目標にすればよいのだろうか。死を定められていたものの全ての性質を除いた生命、罪ある者の持つまいる全ての性質を除いた生命、即ち神の愛である。

この永遠の生命を得る為には神の子となる事であるが、本当に信仰の言ふ事が確かな事なのか、それは單なる推測に過ぎないものではないか、という疑問が起さないと、限らないのである。しかしそれは私達がそれを本当に信じ得るかどうか、という事を決まる事である。

信仰とは神がイエス・キリストに於いてその御心を啓示されたという事を確信する事であり、また私達の成す事は、この信仰の内に生き、喜び、永遠の生命の意義であるこの愛のうちに生きることである。

終わりの日か

人々は気がついていっているのではありませんか——

「世の終わりが近づいていっている」ということだ。

文明はほんとうに人間を幸福にしただけでしょうか。科学ははたして人類の未来に希望をもたらしただけでしょうか。——否！ 現に、私たちはこの地球をおおつかずかすの公営のため、生命の危険にさらされていっています。

夏の休暇に海へ行きまして、そこには遊ぶためのきつね血まなこになつていゝ群衆がひしめいていました。まるでやけただらけの文明そのものが水に浸りにきていゝやうでした。

「終わりの日には困難な時代がやつて来ることをよく承知しておきなさい。そのとき人々は自分を愛する者、金を愛する者………神よりも快楽を愛する者………になるからです」

「主の日は、盗人のようにやつて来ます。その日は、天は大きな響をたてて消えつせ、天の万象は焼けつくずれ去り、地と地のいろいろなものは焼きつくすられます」

きょうといふ日にも、さばきの「主の日は到来するかもしれせん」。

(百万人の福音九頁より)



「それ故死は必ずしも恐るべきものではない。恐るべきは罪である。我々はとうてい逃れることのできなない死を逃れようとあがくよりは、むしろ逃れうる罪から逃れようと努力する方がはるかに勝つていゝ」

「逆境の囚籠」より

証言

大口 初子

私は、去る四月七日でございましたが、平野先生が私の家へおいで下さいました時、大分の皆様のお希望だとおっしゃって、私に「証を是非」と思いがけないお言葉を頂き、「ちょっと困ったなあ」と思いましたけれど、「静まりて、戒の神たるを知らしめ」の御言葉がさつと閃いてまいり、本当に良いチャンスとを神様が与えて下さったのにと、気持ち、大きな責任を感じて感謝して受けさせて頂きました。

神様が、天地の造られる前から、キリストにあって私達を選んで下さったと、エペソ・一・六に記されている様に、私は母の胎内に居る時から、教会に入っておったとご言います。小倉で生まれました。私が三歳の時、父はお腹の大きい母と、兄と私の、二人の兄妹を産して七くなりました。間もなく母が生まれましたが、この私達の家

族をみかねて、当時製鉄の顧問でいらつしやうた「城さん」とおっしゃる方の真様が、福岡市の森の町にございました日本キリスト伝道館に行く事を勧め下さいまして、先ず城さんのお宅の家庭集念に専かされて、いつも「母を慰め私達を愛して絶えず祈り続け、導いて下さいました。

その頃並所の方々が、私の目を見て、「この子は学校にやらないで、何か好きな物でも習せなさい」と信仰のない人達は皆そうおっしゃいました。しかし、城様御一人が学校だけほんんば事があつても是非、何とでもやらなければいけない、とおっしゃって下さいましたそうです。

そして私が七歳の時に、福岡市森の町の伝道館の門の側の長者さんのお宅を留めて頂き、早未祈禱から、夜の名道集念と、所有集念に朝から晩まで出席し、私達三人兄妹の為に特に私の目の為に、絶えず祈りつつ育って下さいました。

城さんのお母様も、いつも「私達を見守って下さいまして共に心を合わせ、祈りたり讃美したりして励まして下さいました。

この様に、神様の御愛に育ちまわって育った私は、

学校へ行く事より、何れも教員へ行ったり、家で聖書や讃美歌を唄いま祈ったり、讃美していろいろが一番楽しゅうございました。

小学校へ入学致しましたも、当時大変視力が乏しかつ、下私に、家から学校まで極か10分位しか、かがりませんのに、肝が細く臆病な為で、どうも一人では通学せず、小学校二年生頃まで、母に途中まで送ってもらつたり、学校の教室の側まで毎日送ってもらつたり、遠足などは必ず母が連いて来まくれなかつた、不友達と一語にさつと先ん事ができなせんでした。そこでおオに苦辱感が強くなつてまいり、学校で上級生の男の子に「ビンガラメ・ヤーイ・ビンガラメ」とかうがわいませんで、日曜学校へは通つたりました。私は目に糸をいっつ下いたのが、神様が愛して下さるから大丈夫、と耐え忍んでいました。

おりました。その頃、お母の母も女学校への入学の事を大変心配致しまして、お母の友達の紹介に依り九大の眼科部長先生の診察を願ひ致しまして結果、この視力では絶対に女学校に行く事はござらないし又盲学校は東京にしかなりません、とほつたり言われました事を私も覚えています。

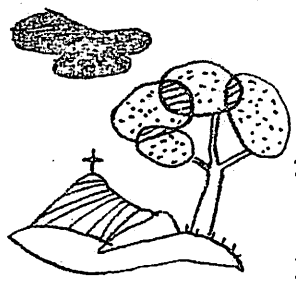
結婚も許さず、もし結婚してもお母が住まいた子供かかゆす矢張り子と宣告され、母はすつかり失望して遠方にくわたりました時、全まを御存知の神様はそう長い間試みに合おせたまいません。

翌朝、さつと私達の小さな住居を訪問して下さいました二人の先生は福岡市立福岡盲学校の教員方先生は松月先生がございました。

夢がと思いまして。母はさつと私を転校させる様にしました。其の時から盲学校まで一時間半近くもかつたりました。環境のよかつた教室の隅の隅を離れて盲学校まで徒歩が十五分位の当所の高砂町に住居を構えました。妹は兄と同じく附属小学校へ通うはずでしたが、盲学校の向いに入塾小学校がございましたので、私を助けてお母に一通り通学する事に成りました。

子マ、学校は其くはなりましたけれど、教会が不
 かなかのつからず、月日が経つにつれ、だんだん
 顔も乾いてまいりました。母が十日か二十日も寝
 ました。ごしうか、良くは癒えなごごいません
 が、会堂も何も無いナザレン教会を見つりました。
 確か別府にたつれ、ますすエグサ先生ごしたと思ひ
 ますが、道分先生が支わられたり、最初どの先生
 でしたか。罹かごごいません。とにかくイエス様
 に立ち帰る事がごま本志に喜しゅう
 ございました。

稽か中等部の三年生頃だ、たと
 思ひますが、福岡よりハイバル・
 リーアに申しませしマホーリネスの
 先生方がおいでになり、大仏さま集會が
 ございました所、御聖霊が私の内に宿り、その集會
 後、用もなくナザレンの馬官先生に依り、洗礼を受け
 ました。

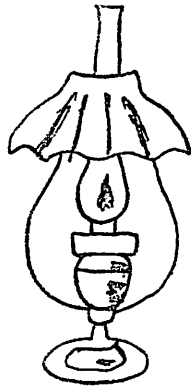


その頃は、大変内なる聖霊の火が燃え、なりました
 の路傍公道や日曜学校のかたわら、なりました。
 ころころ見えざる御手の御導と、お守りに依つて、
 聖肉交に非常に熱く、なりました。

やがて昭和十七年三月に、前夢遊する卒業し、ホフ
 ト一息つく間も、九下のマツサーズ附属部へ
 就職させられた。主は私の為、いつも最
 り良い道を、開いて下さいます。
 思ひも、かやいなす、ぼろしい取場を、与えられた。
 母と女に、心から感謝しました。母は、若んご毎日
 の様に、「和々マン、ちよつと、お祈りしなさい。」
 と、聖書を、読んで、開かややく、お祈りしました。
 可ハネ・九・三に、「親の罪も、なく、子
 の罪も、なく、この世に、依り、神の御業の
 現れ、わたしの、なりました。いづれ、口ぐさの、様に
 云々、よく、なりました。後に、母が、お祈り、なす時
 たり、その御言葉、カカが、遺言、ごごいませ
 ました。子使の、頃は、この御言葉、の、意味、は、解、かり、ませ
 ん。なりました。が、私の、様に、お祈り、なす、者、が、お、証、人
 として、御業、を、現、れ、なす、し、て、なす、と、御約束
 された、お祈り、なす、ゆえ、なす、信、じ、なす、神、様
 の、細い、声、に従、つ、マ、又、母、が、残、し、なす、お祈り、なす、足跡
 を、一、生、懸、命、に、辿、つ、なす、お祈り、なす、思、ひ、なす。
 本、当、に、平、凡、な、ごごい、なす、なす、が、私、に、お、え、ら、れ
 た、御、恩、を、一、つ、一、つ、教、え、なす、教、り、なす、なす、と、なす

教えられませんが、結構なほど手廻りよくておしゃべりな感じが、神様は実に視力も本音に完全な男の子を育て下さいました。その子はたぶん中二学年に成り日曜学校も欠かさず参りまわります。

ただ今では、神様の縁のゆかりの御理のつらに私の幼い頃は日曜学校の先生でいらした根本先生は、自様の百合子先生の教え、八幡宮田舎に家来折って参ります。



うべ、われよきゆづりを得たるかなつゝ
求道がはじまる 伊想須 泰子

翌朝は早く目を醒ました。朝食をそこそこにすませ、兄と二人教会へ向った。明けやらは五月の朝、空は煙ごどんよりしていた。教会の石段（旧会堂）をのぼる。おさるおさる押した戸は、ぼんぼんが急木に軽く開いた。未知の世界へ抵抗を感じながらもともかくふみ込んだ。ベンチ・教卓のある薄暗い部屋に親しさは見出せなかったが、跳返すものもなかった。後の角のベンチに兄と二人そつと腰掛けた。電車の音とこの家のどこからか響いてくる音が伝わってきた。

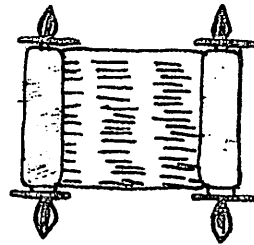
やがて一人の男の方が来られた。：丸橋さんである。！聖書と譜なしの聖感譜を借して下さり、前の席へ案内された。二三人の方がみえ、先生が下から上って来られた。聖感譜七十八番は少しも訓じぬなかった。この朝、何のお話か少しもわからなかつたが教会を出る時は、ともかくやつと目的が達せられた。ここぞ求めに求めなければ、このキリスト教で救われたいなら私の救われる道

はないのだと、春水の陣をしいてふみ出した。以前私は、どの宗教でもがまわらない、それに依つた無我の境に達し得たら、と考えていた。

だからこの頃盛んだった、踊る宗教、でもあの人達が本当に自分をその中に投げ込んでゐるなら尊いと思つていた。でも私は出来ない、といつても自分のカマはきくけないと悟つていた。ともかく欲しかった、生涯かけろ悔いのない生活が。

。 教会通いと就取

エマ、早天祈禱会通いが始まった。火曜から土曜まで、毎朝六時。早く起きるのは苦にならな。兄は火木土と一日おきに行く事にしている。終つて出勤と帰宅に別れる。行かない日は早天から帰つて朝食、兄は出勤した。一冊持つていた小さな新約聖書を先ず、がむしゃらに読んだ。字を讀んだだけさつぱり物からなかつた。しかし旧約聖書が読みたたく、兄の給料日を待ち切れず教会から借りてきて読んだ。



早朝さつさと歩いてマー十五分教会へ。帰つたその朝の不話、疑問、自分の心の動きをノートに記す。そして聖書を讀む。解らないながら

この生活が一個月ばかり続いた。尊い時期だったと思つ。聖書に親しみ、説教を反響する生活は、遠かつたキリスト教を身近に感じさせはじめた。

十字架につぎ、神の愛と義につき、沢山の疑問がでてきたが、早天祈禱会出席、質問、聖書を讀む、そして祈りを覚えた事によ

り、疑問の糸はほぐれ始めた。兄は時々友達を連れ帰りお酒を飲む。私も相伴してビールにサイダーを割つてポーターを肴として飲んだりした。夜晩おしく飲みすぎ苦しむ一晚を送つたが、此晩ひどく後悔し、以後飲まない事を決心した。翌朝の早天祈禱会には行けなかつた。晩は祈禱会だった。また神様の愛を探知する事の出来なかつた私は非常に苦しみ、もう駄目だ、教会へ行く資格はないのだ、こんな者が教会へ行つては神様を冒瀆する事になると、お酒に酔つた事から自分の弱さをみつめどこまでもおち

込んでいく気がして悲しく苦しくとめどがなかった。しかしこのまま教会へ行けなくなるなら一体私はどうして生きていく事ができるだろう。苦しみの中から頭を上げた。今捨つられたらもう駄目だ。こんな者ども……と。もう一度行こうと思いまち、おののく心を押え、後すざりしような足を励まして、薄暗くなりかけた道を教会へと進めた。

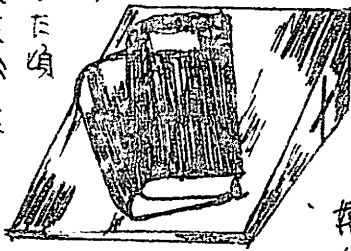
六月になつて中津の義兄の世話で小倉薬品に勤める事になった。その頃（十九年前）兄の給料は七千五百円位であつただろう。家賃は六百円、水道電気代共に千円と少しを一軒隣りの家へ預け、いたが生活は苦しかった。私が勤めたら少しは楽になるかもしれない。私の給料は初め五千円位だつた。

この頃、十一献金の話を聞いた。

献金といえは、始、日曜礼拝に十円づつ

計二十円だつた。少し息まかれ、解りだした頃

一人五十円計百円に値上り、更に恵まれ集金に行く事が楽しくなつて一人百円計二百円に値上り



した。しかし金をささげなさいといふ願いを持つようになつて十一の話を聞き、何の障りも感ぜず十一献金をさせて頂く様になった。こういふ恵に感じる推移も面白い。その時々信仰に依じて無理強いなさらない暖い神様の御愛を知る。

さく、勤める私は嬉しくたまらない毎日だつた。早天祈禱会からすぐ出勤、早いで電車も遅まず聖書を読みながら行く。朝礼返相きの時間があるのど取場の掃除をする。教会に行つてくる事を少しも恥じなかつた。むしろ誇りとしていた。神様の事がほんの少しづつではあるが解つてきた

喜び、イエス様の十字架が私の為だと知つた。驚き歩いてもほほ笑みか自然にのぼつてくる。救われた当時の新鮮な心のなごりであつた。

暗かつた心、不安な心、心がやつと生命を捧げても悔のないものに到達した悦びと安定。ふつと汚ない自分に失望しそうになる事はあつても、ともかく兄と競つて聖書を読み教会へ行く生活は、そこから離れる事を望みが一途だつた。

ガランとした部屋は少しづつ面積が狭くなり始めた。石油コンロが置かれた。兄が得意の腕でラヂオを組み立てた。貨札の厚さが減り、青玄がオーバーが押入れにぶら下がる様になった。新しい洋服を買った嬉しい気持ちも覚えられている。高下駄に番傘を通勤してみたが、レインシューズを買った悪い道を喜んで歩いた。借金があったのもなく返した返した返した。私の帰宅は遅かった。兄の方がずつと早いのが夕食の仕度は兄が支持つまくれた。食パンに砂糖と下茶丈の事。テンアラがつく日もある。ソーメンに葱を散らした醤油のつけ汁、鯨のベーコンのふかすという日もある。手のかかからないものばかりで味気ないはずなのに、楽しい。ぼつかりだった。余り春にや喧嘩をする時はあつても、支えのある生活はそれ以上後退しなかつた。

早天祈禱会、新禱会、伝道集会、礼拝、通いはせ、せと続けられ、神様の心とこころにぐんぐん喰い込んでいった。いっしが兄も、煙草も酒も止め、共に教会通いに励んでいた。

神は愛なり。

近 詠

正野 與志 尾

- 白牡丹 ほのかに紅を 沈めおり
- 連れだちま 彼岸詔もえや 睦の道
- 取りいそぎ 梅雨の晴間の 袋かけ
- 鵜雲 國見の浜の ひるさかり
- 梅雨に入る ものみな 坑底に沈めおり
- 早霧ちの 子に今朝も 時雨つつ
- 朝やけの 街を小走りた 行く人

パン屑の歌

句集

ルデヤ

(古い日記裏の中から) ?

神様 わたしの心は艶ひ歌います。

あの人この人は、わたしに語りかけて下さるのです。
主にある人の讚美の歌は

このいやしき女にも聞きわけ

力をあたえられて

ぼろぼろとこぼれおちてくるそのパン屑を

わたしはむさぼり拾って食べるのです。

手がひつじ銅いゝの声をききわけ

そのねぐらに帰るやうに

そのとき、わたしの心は喜ぶおどり

わたしの胸ははりさける様にして

涙あふれます。

神様はわたしを愛し

わたしはその腕の中に抱われます。

パン屑はわたしのかた

わたしをまなして下さいます。

涙をもつて歩んだ人々の声

神様、いつもこのわたしに下さい。

完

。 おばあちゃん 呼ばれ馴じみて 春炬燵

。 雨陵く 日々の静けさ 春炬燵

。 歌心 ありて夫婦や 春の雨

。 磯の香の はしり若柳や 今朝の膳

。 山寺の 石段登れば 落の臺

。 春の暮 遠く離れし 子を思ふ

。 汐引けば 手に手に熊手 浅淵掘る

。 古雛や 子ら皆遠く 離れ住み

。 タレぐれ 光りて見ゆる 白牡丹

。 時過ぎて 見る人ぞなき 紅牡丹

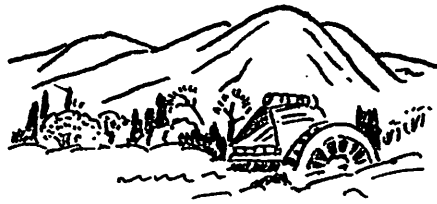
。 初夏や 白除帽子が 草むしり

。 母の白や 娘の便り 鏡む夫婦

。 棚竹も 紐みて朝顔 植えにけり

。 来る毎に 孫の成長 今年赤竹

帰らぬと 手を振り切つて 砂遊び
 毎日が 母の日哉れ 聖書読む
 梅雨入 はや水かさ見ゆ 土橋のな



八月十日 九重山万歩

岩井 芙美子

「よきおとづれをシオンに伝える者よ、
 高い山々のほれ、
 のきおとずれをエルサレムに伝える者よ、
 強く声をあげよ。」

声をあげて恐れるな。

見よ、主なる神は大能をもつてこられ、
 その腕は世を治める。

見よ、その報いは主と共にあり、
 そのはたらきの報いは、そのみ前にある。

イザヤ四〇章のみことばは、くすしき神のみわざにしがたがって、登山を試みる前の私にすばらしいおとずれとなった。

四三年、養養会の祈に、とにかく聖書を通読しなさいと、神孫と先生のやける思いに従って、決心を新たにレマから、何処に行くにも私のカバンの中にあつて、祈々に読ませてもらいた私に、今日の日に主がそばえて待って下さった事を知る。

「慰めよ、わが民を慰めよ。」

ねんごろにエルサレムに歸り、これに呼ばわれ、その服役の期は終り、

そのとがはすでにゆるされ、

そのもうとろの罪のために二倍の刑罰を

主の手から受けた。

イエス様ありがとうございます。どうか今日も

あなたの栄光の故に一切のわざわいから守つて下ささい。

イエス様の御名が地にあがめられますように、主人と子供二人と共に、山の家を伴つて下さったおべんとう、水筒、更に四合瓶の中にお茶をつめ貴重品と、果物の罐詰にお菓子少々、カメラと聖書をそれぞれの荷として出発。

八時二十分のバスで先ず長者原へ。空はあくまで澄み、緑の濃淡の美しさにみとれ、高原局からのバスは、あつと言ふ間に休けい前についた。前途をもう一度祈つて、主人の為にビール一罐（二の肉）子供達の為にチョコレートニケを求め、小憩。水筒の水をつめなおし、子供達の出発進行のかけ声は喜びはすむ。

今日のコースは硫黄山をぬけて、すかもり越えから九重山へと朝になつてから、向気なく決定された。始めのコースも山男達の残しにくれた標識、そして岩がら岩へと黄色の目じるしをたどつて行けば、道はけわしくともひとりでも足を運ぶことができて、その労に感謝をする。

先遣はいつも弟、それから主人、兄は一着重い

べんとうと水筒を一手に担つてしんがりに行く私をいつもかばつてくれる。男三人に主が共にいます。わたしはいつも恐れることがない。硫黄山の煙を右手に見ながら進む道は、わたしは死の蔭の谷を歩むとも、わさわいと恐れず、と二度三度口から思わず出るほどに、草木も全くない。ゴロ／＼道ばかりつづいた。

谷ひとつへだてた右手は、崩れ落ちて来そうな岩が七〇度の傾斜を保つて私達にはむかっている様で早くその場からのがれたかった。

貴重品とお菓子和聖書の入った袋を腕に通した右手に傘をさし、左手には弟のひてあました四合瓶をだいて、私がこけたら命の水が無くなる。一足／＼岩を踏みつけ、一五〇〇米のすかもり峠の道も、主の愛に満たされながら、たいして疲れることなく



禍ることなく支度済しかつた。

峠には石とセメントでかつしりと固められ、売店があつた女の子一人坐つていた。長者寮から運んでくるのだという水を冷やしたビール一缶も、ここまでは来ると一五〇円、ジュースが倍の八〇円一本ずつ求め四人までのときうるおす。峠を吹く風はすばらしく流した汗もひと引き、途中、若人のグループ、子供会のグループが逢い、おまけに「コンニチワ」お父さん頑張つて下さいと声をかけ合つて別れられ、雨はこの道を引き返す気は毛頭おこらなかつた。

先手を見下すと、いつときのゴロ／＼道とすくに乎らな砂地となり、冬山の登山者が道を過らなげようと祈りをこめて積まれたケルンが右手にずつとのひで九重別れにつづく登り公配まで至つてゐる。

一息ついて「さあゆこう」、下りは傘をさして足もとに注意し、ケルンに私達もみつけた石ゴロを誰かの為にと、厳しい冬山をえがきながら祈りつつおくれた。

九重別れに登る道は険しくとも、もう先の見え

るが故に、いそがは別れと直線コースをさけて左手の道を選ぶ。上からの呼び声にはげまされ、やつと登りつめると服の前は青空にくっきりと浮ぶ三角錐の久住山のいたゞき。しばし山の美しさにひかれ、見とれ、いるうちに、陸線にまつて右手の深い谷底から真白い霧が走るように上つて来た。そこから山頂への足は二〇分だが、一昨年もり経験済みなのも、途中の岩かげに身をよせ、昼食をとる。と見え、固く又住の頂きは霧の中です。ぽりと、その姿も完全に消れしす。

本当に主の造り賜うた大自然の光景を、まのあたりに見せて、神の峻厳と偉大さに畏れ、ひれ小さざるを得なかつた。

みやまきりしまの廃木をひろい、雷を地ぞれ、傘をさし袋の中に押込んで、雨ひあられ、その姿に別れを惜しみながら、屋生山を右手に救いの方におか、つて又歩き出した。「この道は、いつか来た道。あ、そうだよ」と一昨年ここに、残れた足あとを踏み、足との草木に心をよせ、あのりんどっけ今年と咲いて、いるかなど、思い出さたど

つめの降り途は、杵掛山の難所も樂しみとかわつて、展望台からいっきに牧の手に下った。

冷い水をふんだんに使つて顔を洗ひ口をすすいで、そこで一時固位休みをとり、両ひはじめの手定をくつがえして、山の家まで歩こうと意氣高々二時四十分出発。

行きはずいぶんの難所と思はれる山系、道も下りとあれば足もとは滑る様、風で倒れ大木を築り越え、下きくぐり、落葉にかくれ大巨木な牛の糞に足をつっこころは悲鳴をあげ、まわりに液うつ笹の葉の大きさに目もみはらせ、うっそうと茂った木の肌にくれれば別天地の心地、一そこにはしれもおらず、山犬も共になむ事は無い、ただあがなわれ長者のみそこを歩む、一足一足みことばにふれ、主の愛にふれ、足あとを残し、思いを残しての得がたい一日でした。

「もろもろの谷は高くせられ

もろもろの山と丘とは低くせられ

高低ある地は平らになり

険しい所は平地となる、

こうして主の榮光があらわれ

人は皆ともかくれを見る

これは主の口が語られたのである、

わたしは神の前は何を言い得ましようか、

ただ主によつて造られ、主によつて運ばれ、主によつて取り去られ、主のみもとに帰るその時、わたしは主のものですと低くされるばかりでした。

帰つて、お祭あがつた写真の一枚一枚を見ながら……

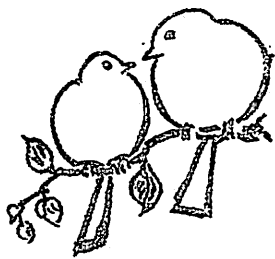
「主は牧者のようにその群を養ひ、

そのかいな小羊をいだき

そのふところに入れて携えゆき

乳を飲ませているものをやさしく導かれる、もう一度、みことばに感謝する私達でした。

完



わたしの旅行記

正野 真 宏

(これは六年程前、私の勤務先のグループで四国方面に旅行した時、お互いに見せ合うために書いたものを少し手直ししたものです。徒らにあまり信仰的に書いていませんので「ぶどうの木」の紙面を活すことをためらいましたが、うとうとしい夏の話題のひとつでもなればと思ひ載せってみました。)

十一月三日早朝、我々四国旅行班七人は、岡山駅に降り立った。空はよく晴れている。私は眠気をさますために、大きく深呼吸をした。

それにしても昨夜の列車でどれほど寝ただろうか。ウトウトしながら夜が明けてしまったように思う。

急行「天草」は国鉄さんには気の毒なくらい空いていた。しばらくみんなど雑談しているうち

に十二峠を過ぎたので寝ることにしたが、さて旅行慣れのしていない私はどうしたら業に寝られるか工夫してみなければならなかった。まず腰かけたままで片方の足をスチームの上に乗せ、その上に肘をついて頸を支える。つまりロダンの彫刻「考える人」のポーズである。私は別に考えることはなかったけれども、どうも具合が悪い。永年の習慣で寝る時は横にならないと気分が出ないので、一メートル余りの座席をベットに仕立て通路側の肘かけを枕としてみた。ところが一七三センチの身長が一メートルに縮まる訳がない。たちまち足のやり場に困ってしまった。余った部分は前の座席に持ってゆくと都合がよいのだが、それでは前の人の顔あたりに私のくさい足がいつて問題が起りそうだし、さりとて足を曲げたままでは赤ちゃんのおムツ替えスタイルでいただけないし、仕方なく足を上に真すぐあげてみたものの、これではまるで美容体操だ。それに枕の肘かけが痛くて眠るところではない。私は困ってしまった。時間はどんどん過ぎてゆく、ア、我家のセンパイ布団が悲しいなあ!

お憐りのト女史はうまく納まって気持ちよさそう
だ。短かい人はこうゆう時に便利である。と
にかく何とかしなくてはならない。今度は窓の
方を顔にして余った足は通路に投げ出し、旅行カ
バンを枕としてみた。これだと割に楽である。
早くこうすればよかったのにと頭の回転の悪さを
嘆きつつ私は目をこむった。これで今度目をさ
ました時は岡山だ、万事がうまくゆく……
眠りに入る中でそんなことを考えたかどうか疑問
だが、このままであれば確かに私は眠り、朝はさ
わやかに目ざめることができたであろう。とこ
ろが世の中は思う通りにゆかぬもの、意識もうる
うとしている私の耳に大きな話し声が飛び込んで
来たのだ。斜め後ろの労働者風の二人の男が酒
をくみかわしながら笑ったりささやいたりしてい
る。それまで私はベット造りに精を出していた
ので気付かずにいたのだが、落ち着いてくるとど
うも気になって仕方がない。これではいけない
と耳に栓をして防音装置をしたけれども、その時
はもはや眠気は何かかえ消え去り、すっかり神経
過敏になってしまった。

人が折角苦勞して眠ろうとしたのに……人の
迷惑も考之ぬこのコンコンキキめ……
昔から食い物のうらみは恐いというが、私は眠り
を邪魔されたうらみはさらに恐いという言葉をつ
け加えることを提案する。

私はその男がうらめしくなり、精一杯迷惑そう
な顔をして彼らに向けたが、(私の演技力が足ら
ないのか)彼らは一向に頓着なく話しを続けて止
めようとしない。私の前の人も眠れないのだろ
う、起きて週刊紙を読み出した。私もあきらめ
て起き上り、カバンから菓子を取り出してホリホ
リやりながらポカァーとしていたが、しばらくす
るとイビキが聞えてきた。よく見ると先程安眠
妨害した男が気持ちよさそうに眠ってやがる。ア
ア何という無責任野郎、私をこんなみじめな様に
しておいて自分だけ勝手に寝るなんて……
「目には目を、歯には歯を」

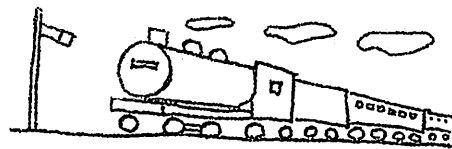
私は余程その男の鼻でもつまんでやるかと思っ
たが、「汝の敵を愛せよ」と教えられているので勿論
やめた。

静かになると再び眠気を催したので横になった

か、その後眠れたかどうかはわからない。そのまま岡山駅に着いた。しかし降りた時の気分は良かった。晴れた空の青さと頬をかすめる十一月の冷たい風が私を気持よくさせてくれたのかもしれない。見知らぬ駅前風景を眺めながら私は何度も深呼吸をした。

— 瀬戸内海にて —

我々が岡山港につくと、すでに小豆島行き船が待っていた。何トンあろうか、あまり大きくはなかった。祭日のためにはほとんど満員である。私は船に乗るのは久しぶりなので、子供のようにワフワフする思いを押しながら、船のへさきに立って瀬戸内海の景色を見ることにした。海は鏡のようにないでキラキラと朝日を跳らせて照り返す。あたりはモヤが薄くかかっている、向いの山がボンヤリと見えた。独くはないが冷たい風が当たって寒い。乗客が陽の当る方へ移動したので、船は随分右へ傾いてしまった。



やがて内海を出て、島々の点在する外海に出たが、先程から何時になつたらこの船はスピードを上げるのだろうかと思えていたが、一向に速度を上げる気配もない。近くを通る漁船に苦もなく抜かれるので美に歯がゆい。このままでは予定が狂うのではないかと幹事としての心配がよけいにいらだたせた。しかしここでジタバタしたところでどうにもなる訳でもなし。これもある意味での信仰だ、オンボロ船にすべてを任せることにした。

その頃になると、モヤもなくなり見透しがきくようになった。私はVさんの双眼鏡を借りて何かいい景色はないものかと見廻している内に、すばらしいものを見出したので、思わずオッ！と叫んだ。双眼鏡の中に映ったものは、まるで壘陰のようであった。一つの小さな島があり、わずかな松が逆光に黒く見えた。その中の一本の松は見事であった。風雪に耐え、岩壁にしがみつくようにして海の上まで伸びている。ア、あの松を持ち帰り、わが家に植之たらどんなによいだろう。(考えたら家には庭がなかった。)

しかしあの松はあそこにあるからよいのであって、他の処では価値がなくなるのかもしれない。無造作に見えるが、じっと見ているとその構成、調和が実にすばらしく、何とも言えぬ感動を憶える。神様はすばらしい芸術家だと思った。

双眼鏡に跌つたのはこの島だけではなかった。島の前に一そうの小舟

が波にゆられていた。そしてその舟には一人の老人が糸を垂

れていた。あたかも島が老人を見守っているような心

暖まる情景である。老人も自然の心ところの中

にいだかれて、何の不安もなく無代価でその恩恵に預っている

のだ。この自然と老人が一つとなった

様は、神様と私との関係を目で見せられたようであった。神様の方は無条件でこのように受け入れておられるのだから、この老人のようにその中に

落ち込めばよいのだ。そう思うと心が熱くなった。



静かであった。平和であった。雄大な自然と人間……どちらも動かなかった。私は双眼鏡を握りしめ、この情景がこわされるのを恐れながら、じっと眺め続けた。

船は小豆島に向っている。この老人と海にもお別れしなければならぬ。寒かった風も陽が高くなるにつれて暖かく感じられるようになった。

——小豆島にて——

小豆島に着いた。祭日とは言え棧橋の人出の多いのにまず驚く。悪い時に来たものだと思いが身の不運を嘆いてはみたが、まさか他の人に「あんな帰えってくれ」とも言えず、仕方なく懐の財布に気をつけながら人垣を分けて行った。

その時マイクが「寒護溪へ行く方はバスが待っていますから急いで下さい」と放送した。私は同志六人をせかせてバスの所に走ったが、すでに満員で非情にも発車してしまった。さあ困った。

後は三分は待ねばなるまい、貴重な時間を残念だともどこでも我が身の不運を嘆こうとしたら「臨時が出来ます」と来た。有難い。お陰で全

買座ることができた。運よく(？)前のバスに間に会っていたら、一瞬間も立たせられそれだけでクタクタになってしまう。ここで教訓、物事は慌てて結論を出してはならない。

私は島と聞くと、何というか文化的にも社会的にも孤立した所と考えていた。だから島の家は古来から伝った独特のものであろう。服装にしても、漁業にしても、農業にしても昔をしのぶことが出来るようなものではあるまいか。実のところそうゆう事を期待していたのだが、ここにはタクシーもあれば商店街もある、本土と少しも変わったところはない。私は初め島にバスが走るといふことがピンと来なかった。民家と来たら私の家の方が島の家に近いくらいだ。海とは反対の方を見ていると島に来ているとは思えなかった。

さてバスは急な坂道を登って寒酸深に着いた。この程度の島でこんな大きな山、こんなに美しい所があるなんて意外であった。丁度紅葉の季節で色が鮮やかに目に映る。

ふと横を見ると、沢山の野性ザルが観光客から

エサをもらおうとたむろしている。これも意外であった。我々を見つけた数匹のザルが近づいて来たので、丁女史がビスケットを投げてやると体の大きいホス猿が飛んできて、小さな猿をけちらして取ってしまった。丁女史は何とかがして小さい方にやろうとしてそちらに投げてやるのだが、ホス猿もすばいのでどうしても小さい猿の口にはゆかない。ホス猿はうまさうに食べ終ると催促しだした。そしてあっかましくも丁女史の手にあるビスケットを箱ごと奪い取った。驚いたのは丁女史「キャッノ」(ザルの声ではない)と大声をあげてとびのいた。しかし無礼な振舞いに頭に来た彼女は気を取りなおすや、勇敢にもハンドバックでホス猿の頭をぶんなぐって逆襲したので、今度はザルの方がキャッといって逃げ出した。

私は以前大分市の高崎山へ行った時、ザルが目クリクリさせておもしろい顔をしているので、ぶざけてにらめっこしていたらザルが怒って目をキッと老らせたかと思うととびかかってきた。私はビョククリ驚天して目をクリクリしながら逃げた

ことがある。危うく「切られのふみさん」ならぬ「カギられの真実さん」(チェノ芝居にもならぬ)になりかけた経験があるので、それ以来サルには近づかないことにしている。

私は猿の顔を観察したことはないが、赤いとは知っていた。しかしこの猿はまさにまっ赤だ。別に我々美男美女(?)が来たから、お尻を出しているのが恥しいわけでもなからうが、本当に真赤である。私は忘年会などでお酒を吞まされるとチヨコ三杯位で目のふちが真赤になるが、このサルにはかなわない。これが本当の顔負けというのだろうか。

サルにも別れを告げて我々は頂上に行くためにロープウェイに乗った。登ってゆくに促ってふしとの坂手港が、さらに瀬戸内海の島々が見渡せるようになる。実にいい景色だ。

急に踏くなつたので左に目をやると、何と見事ではないか。大きな岩がバックリ縦に割れた跡のようすごい絶壁である。船上で見たものが自然の庭の美しさなら、これは自然の彫刻の美しさと言えり。神様はいろいろなものをもって、

私達を楽しませて下さることだ。

六分ばかりの遊覧であったが十分楽しめた。これでお一人様百円いたゞき、観光もよいけれど金がよくかかる。会費が勤くたびに減つてくるので心細くなる。

ここからまたバスで「美しいの京」へ向った。

瀬戸内海が良く見渡せる所だ。記念写真の後、展望台の下の茶屋で暖かい冷し麦を食べた。こんな矛盾したものは初めてだが、なかなかどうしてうまかった。これも会費から払う。勿論予定外の出費である。こんなことならもっと徴収しておけばよかったなと幹事は残金のあらましを計算しながら内ポケットをそつと押えるのである。

——高松にて——

我々は小豆島観光を終



えて高松に来了。先の船とは問題にならない豪華船だったので我々は満足した。高松での予定は源平合戦で有名な屋島と栗林公園であったが、疲れと時間の都合で屋島を有くことにした。

荷物は駅に預け身軽になつて栗林公園へ行く。ここで百円を奮発して案内人を頼んだ。若いガイドさんが出てくるものと思ひまや、スラックス姿のおばさんが出て来た。

そもそもこの公園は今から〇〇年前〇〇城主の〇〇公が別荘として作ったものを市が公園としたものでありますとスラックスおばさんの説明。(〇〇は憶えていない) それにしても随分広い敷地だな。何万坪と言つていた。昔の殿様のせいたくな生活がしのはれる。

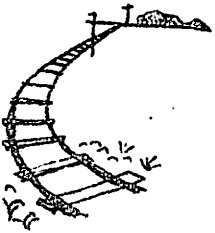
栗林と名がついているから栗の一つでも拾えるものと秘かな期待をいだいていたところが、栗の木は一本もなく、ほとんどが松の木である。実に無責任きわまりない。正直に松林公園としたらどうか。浅はかな期待を裏切られたことも手伝つて一言申し上げたくなつた。

一体この公園に何本の松があるか教えて人かいるだろうか。松並木や上に伸びたい松を右に左にヒン曲げられた残酷松や、池の中の小さな島に所狭しと植えられた日本の縮図みたいを松や、盃の形をしているので奥室がられている松という

ろの松がいろいろと趣向を凝らして兎事な構成をなしている。それらにみくちな名前がついているのだが、頭の風通しのよい私は何ひとつ憶えていない。しかし瀬戸内海で双眼鏡に映ったあの松に勝るものはないと思つた。人工のものより、やはり自然のものの方が良いなというのがここで結論である。

公園の中を歩き廻つたので疲れてしまった。やはり昨夜、汽車の中であまり寝ていないので早く疲れたのだらう。それからすぐに高松駅へ降り、徳島行きの汽車に乗った。するとみんなたちまち舟をこぎ出したのである。

(それから私達は鴨門、大歩危ほけ小歩危、高知、松山と廻つたのですが、私の筆の方も疲れてここで終つていきます。)



終りに

楽しかったこと、悲しかったこと、みんな懐かしい思い出です。私たちはそんな多くの話を聞く機会に恵まれています。

でも、怪談はあなただけにだけしかありません。聞くばかりでなく、読むばかりでなく、なんどなく話してみたいくなる。そんなあなただけの怪談を、ちょっとメモしておいて下さい。そして次号のページを飾って下さい。

今回も原稿をお寄せ下さった方々ありがとうございました。ここに発行できますことを感謝いたします。

昭和四五年十月四日

発行 八幡前田教会

編集 八幡前田教会青年会

印刷 同右